

セブンスデー・アドベンチスト教団

アドベンチスト

September



はらしゆく



## 「立志先生、こんどは天国で」

東京中央教会第一長老 **渡部 正廣**

立志先生の訃報に接し、かねて覚悟はして  
いたものの、そのショックと淋しさは、一入  
大きく、深いものがありました。

立志先生が、東京中央教会に赴任されま  
したのが、昭和51年(1976年)の春のこと  
でした。それから1996年(平成8年)の春  
までの丸20年間、東京中央教会の婦人伝  
道師として、献身的にお働き下さいまし  
た。

立志先生は、どなたをも、かたより見ら  
れることはなく、すべての人を平等に愛し  
、尽くされた方でした。

先生のたどられた人生は、決して平坦な  
ものではなく、涙なしにはとてもお聞き  
できないようなお辛い人生であったこと  
を、直接お聞きしたことがありました。

しかし純粹で、一途な信仰をお持ちの  
立志先生は、すべてを神様にお委ねして  
、乗り越えていただいたのでしょうか。は  
た目には何の苦勞もなかったように明る  
く振るまっておられました。

ご病気の方と聞けば、どこへでも出掛  
けて行って、慰め、励ましておられまし  
た。

人一倍苦勞をした人は、人のいたみがよ  
くわかる、と言われるますが、立志先生  
は、そのような方でした。

人のいたみを自分のいたみとして共感  
し、共に悩み、共に考えられ、共に祈っ  
て下さった先生でした。そして又、楽し  
いこと、笑うことの大好きな先生でも  
ありました。

それ故、立志先生は、東京中央教会の  
皆様から、「東京中央教会のお母さん」と  
して、愛

され、親しまれたのでした。

立志先生が眠りにつかれました、7月  
28日の安息日の朝8時頃、鹿児島教  
会牧師・海老原先生は、立志先生をお  
見舞い下さいました。それは先生が今  
、まさにしばしの眠りにつかれようと  
される、1時間半前のことでした。

その日、立志先生の意識は大変はっき  
りしていました。「今日は安息日です  
ね。一緒に讃美歌を歌いましょう」と  
海老原先生は言われ、『主われを愛す』  
『いつくしみ深き』と一緒に歌って下  
さいました。立志先生もいろいろお話  
しなされたようでしたが、海老原先生  
は、その立志先生を心から、慰め、励  
まして下さいました。

立志先生も、自分が神様の御手の中  
に守られていることをますます確信さ  
れ、「神様にお委ねします」と幾度も  
言われ、お祈りのアーメンの言葉を  
最後に、しばしの眠りにつかれた  
のでした。

立志先生の最も愛した聖書のみことば  
は、「死に至るまで忠実であれ」でした。

先生はそのみことば通りに、死に至る  
まで忠実にお従いして、信仰を全うさ  
れたのでした。私達も立志先生の信仰  
にならって、たとえどのような苦難  
の中にあっても、神様の御守りの中  
にあることを確信して、主の再臨を  
待ち望みながら、天国を仰ぎ望み  
ながら、喜び、感謝しつつ、祈りと  
共に前進して参りましょう。

## 聖句と私

山本 玄菜（慶一）

## 【創世記1：1】 「はじめに神は天と地とを創造された。」

命は「食」にあり、その「食」が危険な岐路にあることに気づいたのが、三十数年前のことです。その後、レイチェル・カーソン著『沈黙の春』が世の中を震撼させた。また、有吉佐和子の『複合汚染』が警笛を乱打した。有機農業が化学農業に変わり、化学工業から造られる合成化学食品添加物が食卓に入り込み、日本の食生活に赤信号が灯っている…。私はこうしたことを『健康日本』誌で学び知ったのですが、正に晴天の霹靂、驚天動地のショックでした。当時二人の中学男子の親として、将来、青少年の健康がむしばまれてしまうという危惧を抱いた私は、サラリーマン生活をやめ、自然食運動に身を投じました。

正業として自然食に関わるうち、私はしだいに自然の不思議さ、魅力、素晴らしさのとりことなり、やがて、万物の創り主を知りたくなりました。しかし、いろいろな書物を耽読したけれども、答えは見つかりません。とうとう私の目は宗教に向けられました。ユダヤ教やキリスト教は外国のものだからという理由で除外して、宗教遍歴じつに13年。でも、望みは叶いませんでした。

諦めかけていた頃に、妻が発病、あと6か月の命と聞かされました。時間との戦い、真剣勝負の看病の日々が始まる。やがて縁あって、韓国ソウルにある、キリスト教系の「ハレルヤ祈禱院」に入院した。院からの指示で聖書を求め、なにげなく開いたところ、「創世記」とあり、何とその冒頭に探し求めていた神がいと簡単に見つかりました。

しかし、共に喜んでくれた妻は、胸に水が溜まり呼吸困難に陥りました。苦しいかと聞いても、苦しい筈が一言も苦痛を訴えず、ハッピーと答えるのみで、臨終の様子は見事のひとことに尽きる。顔もこの上ない美しさを保って皆を驚かせました。しかも彼女は、家族や社員に遺言をのこしておりました、「全てを神様にお任せなさい」と。じつは、初め死を覚悟したとき、私は神を恨んだ。口惜しかった。でも妻の臨終の様子や遺言を思ううち、そうした気持ちもしだいに薄らぐのを覚えました。神の存在というものが解り始めたのはその頃からではないかと思う。

## 【創世記2：7】 「主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。」

何と素晴らしい深みのある、み言葉でしょう。粘土や土で造られたのではなく、吹けば飛ぶような「ちり」で造られたことに大きな深い意味がある。さすが神の業です。土、ちりの成分はミネラルです。私達の身体はミネラル成分であることが解ります。これを常に補充するために、神は食物をお与えになりました。

## 【創世記1：29】 「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであろう。」

すべてが地に根を張る植物です。地はミネラルの宝庫です。植物が正食である所以です。これが自然食の原点であります。そして食するために、神は歯をお与えになった。大小臼歯20本、門歯8本、犬歯4本。これらの歯によって、私達は何をどう食べればいいのかを教えられているのです。臼歯(奥歯)は、穀菜果食の人間と、草食の牛馬とに与えられていて、形はそれぞれ異なる。人間の臼歯は穀物・豆類・種子類を噛み砕く主食用であり、口に入れた食物をこぼさぬよう凸凹の構造にしてある。草を食む牛馬の歯は平らに造られている。目的に合わせて顎の動きも異なっている。門歯は海藻類・果物類を食するための歯で副食用。犬歯は、糸切り歯。繊維を噛み切るためのものであり、断じて肉食用の歯ではない。

何もかも、じつに正確なご計画のもとに、巧妙絶妙に細工されていることは驚くばかりです。神を賛美します。神は自然を創造された。自然から遠ざかれば遠ざかるほど、病魔が近づいて来る。(ゲーテ)「神から遠ざかれば遠ざかるほど、悪魔は近づいて来る。」ブドウの木の教えを守りつづける信仰でありたい。

## — 田中さん、田村さん、バプテスマおめでとうございます！ —

## 「探し求めて」

田中 綾子



私は、山梨<sup>しもべ</sup>県の下部温泉郷で知られる下部町で生まれました。結婚と同時に横浜に住み、二人の子供をもうけました。現在は老人ホーム「シャローム横浜」に勤務しております。

長男の小学校入学に際しては“心の教育”を求めて、近くの亀甲山三育小に入れていただいたのですが、この時初めて聖書に接しました。キリスト教とは全く無縁で、仏教徒として生活していましたので、聖書の内容は小さからぬ驚きでした。

子供二人は広島三育学院の中・高で学び、この間私も、自然にSDAの人たちと接する機会が増え、教会の雰囲気にもしだいに慣れて、いつしかこのような方々のようにになりたいと思うようになりました。

私は幼い頃から「生きることって?」「死ぬことって?」「神様って?」など、素朴な疑問をもつことが多かったと記憶しています。(実は、「エホバの証人」の人たちと聖書研究や朝起会という会で倫理実践研究をしたこともあります。)

いったい本物は何だろう。...そんな時、マーク先生の奥様と学校を通してご縁ができ、SDAの教理について色々伺ったことがあります。そして9年ほど過ぎ、とうとう昨年、私には神様が必要だと強く感じ、聖書研究をマーク先生のもとで始めました。やがてそれまで漠然としていた事の理解が速まるように思え、ああこれは自分の力ではなく、聖霊の強い働きのおかげだと実感するようになりました。

「求めなさい...」という聖句にすがるって本当の神様を求めているのに、そんな日が来るのかしらと不安を覚えたこともありましたが、やっとやっと、生涯忘れられないであろう大切な区切りの日が来ました。主人は、また何か始めたらしいと、厳しい目で観察しているようです。これからも神様と皆様とのお交わりをより深めていけたら幸いです。 (7月14日受浸)

## 「ここにいなさい」

田村 美沙緒



正直申しあげますと、皆様が祝福して下さったバプテスマですが、今でも私自身は特別な感激もなく、以前と変わらぬ生活を送っています。

かつてカトリックの洗礼を受けた時は、喜びと、何か特別な人間にでもなったような感覚で、まるでこれからの人生は一条の光に導かれて輝いてゆくのだ...なんて思っていました。何という傲慢さでしょう。あれから20年、楽しい夢も苦しい事も、人並みに噛みしめ生きてきましたが、人とのわずかなつまずきがもとで、「CAN DO原宿」で田淵先生からカウンセリングを受けるようになり道が拓け始めました。やがて「あ、そうだ。ここは教会だった!」と、通い始めて約1年、晴れやかな7月に板東先生の司式で受浸しました。聖書研究は、今でも先生に指導していただいています。

聖書は、子供の頃から読んでいたとはいえ、全く理解が浅く、まさに自分の浅薄さと比例しているかのようで、皆さんの知識の豊かさに触れるたびに、こんなことでよいのだろうか、ときどき落ちこんでしまいます。

ただ私は、いつの日も神様から愛されていて、「ここ(中央教会)にいなさい」と言われている気がしてなりません。だから、「はい」とお答えして毎週礼拝に出、神様と深く交わり、それを皆さんと分かち合うために足を運んでいます。どういうわけか、そうしているのが一番心地よく安心で楽なのです。しかし、素直に「はい」と言えばよいものを、それが言えなくて、神様の声が聞こえなくなる、「いいえ」と答えてしまう、そんな日がときどきあります。そんな愚かな私でも、神様は愛して下さる。実はこれもまたよくわからないのですが、バプテスマのことでは、私は『いいえ』と言わなかった! 大きな力に導かれていたのでしょうか。「愛」の神様のみ手の中で、これからも、小鳥のように養っていただくと思っています。 (7月14日受浸)



## みなさまのお力を、お祈りを、ぜひ!

伝道集  
第弾

「私が変わる、教会が変わる、日本が変わる」というモットーを掲げて出発した青年伝道の働き「beehiveミニストリー」(『アドベンチストライフ』8月号15、16頁参照)は、毎週土曜日午後5時からベスパーを行っています。9月に“Shaking Tokyo 2001という、青年を対象とした講演会を企画しています。

**テ**ーマは、『おしゃれに生きよう～The Lifestyle of Jesus～ここに自由なあなたがいる』です。「おしゃれ」というのは、

もちろん、お化粧や服などの流行を追うことではなくて、**心と体の本当のおしゃれとは何か、それはイエス・キリストの生涯の中にある、というメッセージ**です。ですから、そのライフスタイルには、祈りがあり、他者に対する奉仕があり、自己否定があります。

**そ**れは日本の若者が見たことも聞いたこともない、**全く新しい生き方**です。その生き方を知ってはじめて人は自由になれる。人生や社会に失望し、目的を失った、この世の若者たちに対する教会からの愛の招きでもあるわけです。かつて1970年代に、イエス・キリストのムーブメントが起きたように、The Lifestyle of Jesus **という新しい青年文化のムーブメントが聖霊の導きによって起こるよ**うにという祈りを込めています。

**プ**ログラムは、別表のように、9月14日から計3回の週末にわたるものです。15、22、29日の午後には、原宿の町で、人形劇、

賛美、チケット配布などを行います。そして、29日午後5時からのファイナル・イベント(講演会)に多くの人を招待したいと考えています。

**教**会の駐車場を「Shaking Tokyo 2001 **お祭広場**」とし、講演会後も親しいお交わりができるように計画中です。そして、講演会に来てくださった人たちが、10月からの「beehiveライブ」(求道者向け礼拝)につながるように導きたいと祈っています。

教会員のみなさまに、ぜひお願い!

**祈りのサポーターとして講演会を支えてください。**

昼か夜の12時、あるいは朝か夜の8時にお祈りくだされば幸いです。教会で配布した「祈りのカード」の枠目を塗りつぶして、教会の受付か、花田か武井にお渡しください。

**関東在住の親戚や知り合いの青年を招待してください。**

チケットや案内はがきを準備していますので、一人でも多くの青年をこの講演会に誘ってください。

**講**演会の対象は青年ですが、**どなたでも**おいでいただけます。この活動のためにお祈りください。中央教会の発展のために、青年伝道の働きをサポートしてください。よろしくお願い致します。

(花田憲彦・武井今日子)

### < “Shaking Tokyo 2001” 日程 >

9/14 (金) オリエンテーション、  
準備(17:00～) 宿泊(中央)

/15 (土) アウトリーチ・プログラム、  
夜からリーダーシップ・トレーニング・セミナー  
(16日正午まで)

/21 (金) 献身会、準備(17:00～) 宿泊(中央)

/22 (土) アウトリーチ・プログラム、証し会

/28 (金) 献身会、リハーサル(17:00～) 宿泊(中央)

9/29 (土) ファイナル・イベント(17:00～)

アイスブレイキング

UNITY ミニコンサート&会衆賛美  
スキット

メッセージ “The Lifestyle of Jesus”

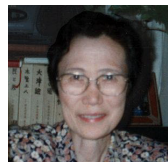
アピールソング

お知らせ、案内

お祭広場での交わり

追悼

## 立志つき先生「あの日、あの時」



## 「主のおいでの時」まで

三宅 光子

立志先生が中央教会に赴任された1976年頃、わたしは旧教会事務室で数年間お手伝いをしていました。先生の第一印象は、細っそりとした優しい方、以後変わりなく、加えるなら明るくてよくお笑いになることでした。当時教会は新築前の繁雑な整理など山積みして大変なときだったことを覚えています。そしてそれから20年もの長い間、教会になくはならぬ存在の先生は、愛情深く私たちに接し導いて下さいました。また、教会のキャンプや睦会の旅行では、先生の巧まないユーモア溢れる話題に遠慮なく皆は大笑いして、それは楽しいお交わりでした。先生が御引退で鹿児島へお帰りになっても、後を慕って4人の姉妹方と鹿児島に飛び、指宿いびすきのホテルで一晩語り明かしたことなど思い出は尽きません。

次回先生と再会するのは「主のおいでの時」。立志先生を先達として、わたしはこれからの道を歩んでまいりたいと願っております。立志先生、いろいろとありがとうございました。

## 「7月28日」

鳥居 美津子

立志先生が鹿児島へお引越しの際、羽田までお見送りした時のことです。その時、いざ原宿を出発し浜松町まで行くのに、慌てて反対方面の電車に乗ってしまいました。先生は細い体で大きな荷物をたくさん抱え、なほ子さんと二人で「東京もこれが最後の電車だから、いい思い出になりますわ」と笑っていらっしやいました。

昨年上京されましたときには、あまりにもお痩せになっていたので心配いたしました。

立志先生が亡くなられましたその日が、わたしの亡くなった娘葉子の誕生日、7月28日と同じ日だったので驚きました。毎年、この日を偲び、立志先生を忘れずに思い出すことでしょう。

## 「わたしの先生」

田村 尚子

「……立志と申します。立つ志と書きます。いつも入口あたりにおります。」もし先生があのとき電話でこうおっしゃらなかったならば、教会を訪ねたわたしはそのまま黙って帰ってしまっていたでしょう。となれば、先生とはお目にかかっていなかったでしょうし、今のわたしもなかったでしょう。それは1992年の秋のことでした。「預言の声」通信講座を終えて教会を訪ねようと電話をかけたわたしへの応答の最後の言葉でした。

実は先生が眠りに就かれてから、先生がおっしゃったことの様子を、そのお顔やお姿や声の調子と共によく思い出しているのですが、初めての者、知らない者、弱い者への配慮に実たに長けていらっしやいましたよね。意識してなさっていたのではなく、身についてしまっていてそのようになさっていたので、自然すぎてその時には気がつかなかったのだと今にして思うのです。実はこれって伝道の極意ですよね。素敵な先生にお目にかかれて、その上に「わたしの先生」とお呼びできることになって、わたしって幸せ者ですね。

**「<sup>かたく</sup>頑なな心がほぐされ」****橘 敏子**

昭和57年から一年間、先生のお勧めにより聖書研究を続け、翌年バプテスマを受けさせていただきました。出会いから25年、いつも変わらず温かいお気持ちを持って接して下さり、一方ならぬお世話になりました。

姑との関係が気まずい雰囲気にあるときなど、偶然にも少し高めの声で、「ごめんください、立志です」とおっしゃってお訪ね下さり、御言葉をお伝えになり、お祈りもしていただきました。その度ごとに姑もわたしも頑なな心がほぐされ、平安が与えられました。

今年6月頃にはすっかりお弱りになり、受話器の向こうでは息も大変お苦しそうな様子にもかかわらず、やさしくお言葉をかけていただきました。

先生のご生涯は信仰と聖霊に満ちあふれた素晴らしいものであったと思います。

**「力強いお祈り」****辻野 好江**

立志先生は、お薬を飲みながら、一生懸命に聖書研究やご病人の方々のお見舞いをなさっておりました。わたしも入院中にお見舞いを受けました。まだ残暑厳しい日のことでした。同室に、結果を危ぶまれながら、ご本人の希望で手術をなされた方がいました。部屋を出られる際に、「お祈りしています」と励ましました。その直後に、立志先生ともう一人の方が訪問して下さり、着くやいなや「さぁ、お祈りしましょう」と、同室の皆様のためにもお祈りしていただきました。それは、今、手術に出ていかれた方を知っているかのようなようでした。その方の手術は、お医者様も驚くばかりに大成功にいたりました。翌朝訪ねますと大変お元気そうに見え、後日外来でお会いしたときは、あれほど苦しまれた方とは思えないほどに快復なされ、感謝致しました。まさに祈りは聞かれたのでした。

立志先生の力強いお祈り、誰に対しても常に変わらぬ思いやり、本当に本当にありがとうございます。ありがとうございました。

**「時間は愛」****熊谷 幸子**

文箱一杯に溜まった先生からのお手紙の束を前に、新たな哀惜の思いを噛みしめています。どのお手紙の最後も「時間は愛です。ありがとう」で終わっていました。

「……この忙しい現代、人は自分のためだけに動き回っています。時間を割いて聴いたり、案じて便りを書くのは愛がなければできないこと……」と一度このように書かれてきて、わたしは却って恥ずかしく、先生こそ全時間を痛みを持つ人のために捧げておられる愛のお方と、あらためて感得したものです。

先生がただそこにいらっしやるだけで、私たちはどれほど深い安らぎを覚えたことか。まさしく先生は弱者の眼差しをもって神の愛を示され、教会に集う喜びを与え続けられたのでした。一夕我が家にお招きした折、楽しい語らいのさ中に突然、先生は涙を流されました。あの涙は、人生の重い真実をとことん背負われた方のみが持ち得る優しさの証であったのかと、今も切なく胸に蘇ってきます。



## 「生かされている」

天沼教会牧師 千先 勉

「生かされているだけで充分神様に感謝できます。生かされている限り、この神の恵みを伝えなければ……」立志先生ならではのお言葉です。15年もの間、結核療養所で死と向かい合わなければ、この滲み出るような言葉は生まれません。「わたしを強くして下さる方によって、何事もすることができる(ピリピ4:13)」。この御言葉を実践できるのは、強い、たくましい体の人ではない。細く、今にも吹き飛ばされ、凍ってしまいそうな人でなければ、全くこのように主にゆだねきれないのかも知れない。こう思わされたのは、青年部の働きで釧路に伺った時でした。凍てつく釧路の求道者宅を立志先生と訪問して回りました。寒風と雪が吹きすさび、アイスパーンのテカテカの道を、大きなスカーフを体に巻き、目だけを出して黙々と歩かれるのです。「先生、まだ行くんですか」「本部から先生が来て下さるこんな機会はなかなかないですからね」「・・・」。日が沈むのが早い釧路。ますます冷えて、体のシンまで痛むような寒さの中、先生はひるまず歩き続けました。先生の後について夜の釧路を訪問し続けたあの「時」と、その時の「言葉」が忘れられないばかりか、私の牧会の大きな大きな太い精神となりました。そしていまでも、私の心にこたえ続けています。

## 「お励まし有難うございました」

林 君子

立志先生との出会いは、中央教会が現在のラ・フォーレの位置にあり、しずかな街の白亜の教会と呼ばれた頃です。当時神宮前四丁目に住んでいましたので、我が家で友人を集めて毎週一度、聖書研究をしていただいていた。山本淑子先生にかわって立志先生が新しく来て下さるようになったのでした。その頃私は立志先生と同じくらいの体重でした。(誰も信じてくれない)。ツイギーという言葉が流行していて、先生は嬉しそうに「私たち流行の先端ね。ホッホッホ。」...やがてやがて、ツイギーは過去の栄光となった私の太い腕をつかみ、先生は「うらやましいっ、このお肉私に少し分けて頂戴！」茶目っ気たっぷりのあの笑顔。もう見ることはできない。私が悩み、落ちこんでいる時「常に喜べ、絶えず祈れ、すべてのことに感謝せよ」(テサロニケ・5:16~18)のみことばのカードを下さった。以来、私の大好きな聖句です。「林さんは元氣印でいつも笑っているのが一番」と励まして下さったこと、一度や二度ではありません。三人の娘の成長と共に私を支えて下さった先生。先生の人生は、愛にあふれ、喜びを見いだす人生だったと思います。誠実に生きることの切実さ、やさしく生きることのつらさを内に秘め、この世の最後も「喜びと感謝」でしめくられ、今も夢のなかできっと軽やかに、ホッホッホと笑っていらっしやることでしょう。

### 小さな祈りの輪 (8/11)

鈴木徹さん、由佳さんの次女「佳音ちゃん」の献児式での出来事。橋本笙子さんから「献児式」についてのお話を聞いた子供たちはそのまま講壇に上がり、小さな祈りの輪を作りました。板東先生に抱かれた大きな瞳の佳音ちゃん、お兄さんやお姉さん、そしてきっと大勢の天使に囲まれて、神様からの祝福を受けました。

遥けるも師の恩しのび秋立ちぬ (保)  
 宣教の慈母逝き秋声しのび入る (〃)  
 七夕や二病息災筆のあと (茂子)  
 そこはかと老いに堪える暑さかな (〃)  
 遥かなる原爆忌の遠き空 (〃)

## 牧師によるバイブル豆事典

### 忘れ物はなんですか？ ～収穫の秋の必需品～

収穫の秋です。農作物の収穫のためにはなくてはならないのが雨ですが、パレスチナでは雨季に三種類の雨が降ります。秋の雨(先の雨)と冬の雨、そして春の雨(後の雨)です。秋の雨(申11:14、ヤコ5:7)は、10月末から降り始め、土地を潤し、耕作作業を可能にします。冬の雨(ホセ6:3)は、12月中旬から2月末にかけて降る長雨で、家庭では雨水を水槽に蓄えます。春の雨は3、4月に降り、穀物を実らせるので、「祝福の雨」とされています(申28:12)。福音が世界に宣べ伝えられるために必要な聖霊が、ヨエルの預言どおり初代教会に注がれました(使徒2)。これが先の雨です。しかしこの預言はまだ半分しか成就していません。この時から始められた福音宣教が収穫期を迎えるには、再び聖霊の雨(後の雨)が必要なのです。今は歴史的に冬の雨の期間です。雨水を水槽に蓄える時期です。つまり、日ごとに聖霊のバプテスマを受け、後の雨に備える時期なのです。「教会への聖霊の降下は、未来のこととして期待されています。けれども今、それを受けることは教会の特権です。求め、祈り、信じなさい。私たちは聖霊を受けねばなりません。そして天は、それを与えようと待っているのです」とホワイト夫人は語っています。

「目を上げて畑を見なさい。はや色づいて刈り入れを待っている」(ヨハ4:35)。終わりの時代の収穫(救霊)に備えて、収穫の主(後の雨(聖霊))を祈り求めましょう。これがなければ私たちの教会の目的は果たせないのです。収穫の秋、大切なものをお忘れなく！

(東京中央教会副牧師 花田憲彦)

## 9月のスケジュール

- 9 / 1(土) [説]東海林正樹牧師  
各部役員会
- / 8(土) 東京東地区合同礼拝 (川口リリアホール)
- / 9(日) バザー準備
- /15(土) [説]板東洋三郎牧師  
敬老会 午後 集会室  
アドベンチストはらじゅく & 週報発送  
理事会 15:00～
- /22(土) [説]板東洋三郎牧師 & 子供のお話  
洗足聖餐式  
小羊クラブ 14:00～ 集会室
- /23(日) PFC普通集会  
バザー準備
- /29(土) [説]花田憲彦副牧師

教会のホームページを開設しています。  
SDA東京中央教会のアドレス

<http://www.sda.gr.jp>

### エデン ED園だより

この頃いろいろな色のハイビスカスを見かけるようになった。赤、黄、白、ピンク。赤の他は皆中心が赤い。以前には見なかったいろいろな花が出回り、かわるがわる咲いて楽しませてくれるので、毎朝必ず花の間を一回りする。

今年も、お向かいの家のノーゼンカズラがゆらゆらと咲きみだれて、暑い中を出掛けるわたしを元気づけてくれる。いろいろな花の色に対して葉の色が緑なのが一層花の色を引き立てて、神様は素晴らしい恵みを下さっている。(T.S.)

発行：東京中央教会コミュニケーション部

\* 発行人：板東洋三郎

[住所] 〒150-0001 渋谷区神宮前1-11-1 03-3402-1517

\* 編集人：前中靖司

\* スタッフ：佐藤敏子・寺内雅子・平山茂子・森武靖子・山口保夫